

記者の目から見た美術家たち

饒舌型と寡黙型

高良哲夫

今から3年前、美術担当記者として1年間、県内の美術家と親しく接することができた。美術記者とは名ばかり駆け出しと全く同じ、市内の各画廊の個展、グループ展など取材し紙面に小さな紹介記事を出すのである。毎週火曜日に、少ない時で2カ所、多い時は5、6カ所の会場を雨の日も風の日もカメラと取材ノートをもって駆け巡った。

わずか1年とはいえ仕事を通して美術家たちとその作品に接することができた。作品は専門家に任せるとして、表情豊で個性あふれる美術家たちの性格を私なりに分析してみたと思う。外見からいえば、美人、ハンサム、そうでない人、さらに背が高い人、低い人、太った人、やせた人とさまざま。大柄な人が必ずしも大作に挑むとは限らない。太った人が神経の細かい絵を描くかと思えば、小柄な人が100号、200号の絵に挑戦している。人間は自分がないものに憧れるが、美術家といえども例外ではないようだ。

性格となると、これもまた千差万別。記者は相手がいて初めて取材ができる。そこで気になるのが取材対象者の人柄である。芸術作品と性格は別問題だが、何しろこちらは記事を書かねばならないという使命がある。陽気な人もいれば、おとなしい

人もいる。そこに記者の苦労があるし、面白味もある。「乞食と新聞記者は3日やったらやめられない」とある先輩がいていたが、まさにその通り。一国一城の主としての芸術家は個性にあふれている。

取材を通して県内の美術家たち、まずインタビューして大別すると饒舌型と寡黙型の二つのタイプに分けられる。

饒舌型にはさらに理論家型、自己表現型、ネアカ型に分けられる。

理論家型は「最近の画壇はどうですか」と水を向けると、「そうですね」と絵画論から始まり現状をとくとくと教えてくれる。非常に貴重な存在だが、自らのことはあまり話してくれない方もおり、取材者としては物足りなさが残る。自己表現型は絵画論はもちろんのこと、自分の狙いとするところを微に入り細をうがって説明してくれる。記事にする時大変ありがたい。それに比べてネアカ型は一見陽気だが、肝心の話になると要領を得ず、後で記事にする時に苦労する。

次に寡黙型には文字通りダンマリ

型、放任型、ネクラ型などがある。ダンマリ型は「どんな狙いがあるのですか」とこちらが質問しても「ウン」とも「スン」と答えてくれずダンマリを決め込んでいる。これに対し放任型は「あなたが見て感じたように書いて下さい」と突き放す。仕方がないから鈍い感性を無理矢理といて作品を見て、清水の舞台から飛び下りる覚悟で記事にする。最後にネクラ型。「マスコミの人で私たちの作品のわかる人はいませんよね」と足元にも寄せつけない。なるほど作品は決まっているが、どこか近寄りたがたい雰囲気である。



取材中の筆者(右はし)

以上、一線で接した美術家たちを独断と偏見で分析してみた。記者の感想では饒舌型より、むしろ寡黙型の人に多くを学んだ気がする。ともあれ、自分の恥を「書き、続けた1年でもあった。

(新聞記者)

額縁の専門店

合資会社 前田額装商会

〒900 沖縄県松尾2-7-29 ☎(0988)67-4811 FAX(0988)61-0367

絵のご購入は

OCクレジットで

沖縄信販

労働と絵画

あるいは原初の宇宙と 交感する方法について

渡名喜 元 俊

絵画という芸術の媒介（容器）は、それに何ものかを表現して、その物性を覆い隠すのではなく、現代絵画が問うている問題は、媒介そのものの解放にある。つまり、絵画における表現が問題になるのではなく、芸術における絵画そのもの、表現そのものの変質が問題であろう。では、どのような作業が現代の表現たり得るか……

農夫は生活の糧として畑に種子を蒔き、それを育てる。天と地の営みに感謝し祈りながら、種子が立派に実ることを信じ、日々の労働に汗を流す。その労働のなかで農夫は、素晴らしい満足感と、自然との一体感を体験し世界と交感する。宇宙は農夫と共にあり、種子の成長と、農夫と、宇宙はその労働のなかで共に共鳴する。



（制作中の渡名喜氏）

私の絵画制作は、そのような農夫の労働に近い行為である。床に張られた無垢な画布（畑）に、無垢な労働（種まき）をほどこし、その物性の熟成をまつ、絵画の支持体が、その存在を、無垢な労働の由に世界を涵養する。内に呼吸し、外に共鳴し、宇宙の鼓動のなかで、表現とは無関係に、世界を開始する。何かを表現するのではなく、宇宙の胎内運動と

して私の絵画は現前し、視覚に作用する。水を張られた支持体（絵具、綿布）は、私の行為によって、時間と共に宇宙の物性を解放する。宇宙と、支持体と、行為がこだまして、私の絵画はそこに存在する。独創的自己表現という近代絵画理念から解放された作業のなかで、物性としての絵画は強力に視覚に呪縛する。人間が中心ではなく、支配、被支配の関係でもなく、全てのものは平等に、その宇宙内存在としての存在を顕わにする。作業（労働）している私の感覚はカラッポの受容体である。それ由に宇宙の胎内呼吸を感受する。大気の気配、大地の響き、ラジオの雑音、全ての宇宙の胎動がカラッポの私と交感する。その感受そのものの現前が私の絵画である。

私の絵画は、何かを表現して、啓蒙するものではない、まして、社会文化的ノスタルジーや、沖縄的風土や、絵画的理念、等々の表現ではない。私の絵画は一種の生きものである。虫と同じような宇宙内存在としての一層の生命体である。

現代社会のなかで、人間そのものが情報化し、自己崩壊を来たしている。人間はウォーホルが云うまでもなくすでに機械である。そんな状況で、自己など、その内的表現など、どれ程の意義と信憑性があるのだろうか。近代絵画の造形理念は現代生活のなかですでに霧散しているようだ。アバンギャルドの終焉、ポスト・モダン論、等はその証左であろう。

近代絵画のなかで、ゼザンヌが生涯を賭けて、あれほど自然を渴望したのは、すでに自然の崩壊現象を予感したからであり、その造形理念をもって、自然を二次元の絵画にパッサージュし、確固たる構築を望んだのは、やはり自己崩壊の危機をはらんでいたからであろう。

ピカソがその多様な変貌で破戒したもの、あるいは、パピエ・ユレ等でハッチングしたのは、崩壊する自然と、崩壊する自己との緊密な関係であったと云えよう。

シュール・レアリストのマツソンらがその自動記述で描いた線は、内的・無意識的自我の表現というよりも、近代造形的デッサンが隠蔽した世界を、いま一度、拭いおとす作業であると云えよう。

ポロックがそのボード絵画（藤枝）で視覚化したのは、宇宙と交感する場としての絵画であったと考える。そこには近代的な意味での絵画はなく広大な宇宙と交感するインディアナとしてのポロックの生そのものの現前である。ボーリングの手法が人間の生と宇宙と交感し、その視覚化されたものとしての作品が独特の絵画を開始し得た。また、李禹煥はその東洋的筆法で宇宙と交感する。何かを表現するのではなく、宇宙の風と共に、宇宙内存在としての物性の存在を顕わにする。

私の絵画は、単純労働の救われない作業のなかで、あるいは、救いのない日常生活の反復のなかで、カラッポの受容体となり、宇宙と交感する。表現したものが交感を現わすのではなく、支持体と、私と宇宙が労働のなかで平等の関係を開始する。そしてその一回性の関係が作品として、あるいは、何ものかとして現前する。

（画家）

●展示会・案内状のご用命は…

（有）平山印刷

☎(0988)89-8748

ギャラリーボイス発刊おめでとう

画廊礼讃

上 間 正 恒

手元に「画廊沖縄」から送られた企画展の案内状が三十数枚もある。一番古いもので60年8月6日から18日まで催された第39回のフランススコ・ゴヤ展である。今、第81回目のイカール版画展が開かれている。その間40回ほどの企画展が開催されてきた。

実に根気がよい。当り前といえはしごく当り前の話ではあるが、上原誠勇氏の美術に対するほとぼしる程の情熱がうかがわれて嬉しくなる。その一方でよくも商売として成りたっているものだとつくづく感心もする。

さて、「画廊沖縄」が勤め先の近くにあることもあって足繁く通っているうちに、上原氏をはじめ瀬底さんらの心温い応待で私の愚問にも懇切丁寧に回答して下さるので、いつの間にか美術ファンの一人に仕立てあげられたのであろうと思っている。無料で美術品を見、時には茶菓子の接待も受け、作品の解説を拝聴し専門用語も教示していただくと、おのずから鑑賞眼も磨かれるであろう。全く今はやりのカルチャーセンターで特待生として勉強させてもらっているようなもので常々有難く感謝している次第である。

美術ファンの立場からの発言を求められているので素人のごく日常的な感想を若干述べてみたい。とくに印象に残っている企画展を案内状を手がかりに遠い記憶の中から掘り起こしてみる。

高橋涉二展

最近の日経紙の文化欄に「ユーモアのある作品十選」としてピカソの油絵「夜明けの歌」が最初に紹介され、次々と人々の意表をつくような、

そしてどこかにおかしみのある、これが「美術品か、ととまどいの目を向けさせる作品の紙上展示と解説があった。この一連の紹介を読んでいたので、高橋涉二展がこの種にまず分類されるであろうと思った。題材も「スキュンダラスのオブジェたち」と名づけ、一風かわっていた。

二十数年前ベストセラーになった謝国権の『性生活の知恵』風に動物たち（虎の子？）のいろいろとからませた戯れる様の生き生きとした表情の動きが新鮮であった。画廊に居あわせた高橋氏に私の初発の感想を述べ、主人公である動物の痴態が嬉しそうに表現されてユーモアのある作品となっていると話したのを題材の特異なせいも今でも覚えている。

金城明一展

61年と62年の二度参観した。オーナーの上原氏が推賞する若手の画家である。確かに「沖縄らしさ」を表わした風物はなんとなく昼下がりのチルダイの雰囲気がある。赤の色が未だに脳裡に残っている。佐伯祐三・ユトリロの赤のある作品と相通ずるものがあるのではないかと私には感じた。

能山崇忠展

案内状の写真「縄跳びの男像」を見て記憶の中のあの時の感情の動きが残っている。手元に置きたい！と強い衝動のあったことも事実だ。引きしまった鉄の塊からくる緊張感、無駄の全くない造形であると惚れ惚れしたことを思い出す。

ルオ一展

ルオの絵は画集でよく見る。私の好きな作家の一人である。重厚さというのか重量感のある油絵、ふて

ぶてしさを適切なことばで表現したいが素人にはその語いの持ち合わせがない。関連して梅原龍三郎・野間仁根など絵の具がどっぷり使われている絵もまた好きだ。企画展は版画であったが。

真喜志 勉展

先日、上京の折西武美術館でクリスト展を見た。「梱包の美術家」として広く知られているとの説明があり、新しい美術であることと「アンブレラ計画」をテレビで紹介していたあの作家と同一人物であることを知った。歴史的建造物などを「梱包」した写真などを見て美術の拡がりに驚嘆した。真喜志氏の表現活動もクリストと軌を一にした新しい芸術なのだとは今は理解の緒がつかめてほっとした気持ちである。

和宇慶朝 健展

シルクスクリーン版画という由。きれいな色彩である。赤・青・黄・緑・紫・白が交差しながら細い面が伸びきっている。軽快な色とりどりというのがふさわしい。杉田久女の「花衣ぬぐやまつわる紐いろいろ」の句と色の共通するものを感じた。

三年前『新生美術』（第4号）に拙文を寄稿した時、朝日新聞掲載の詩人大岡信の『折々のうた』のように、絵画についての鑑賞のための適切な解説が欲しいものだと書いた。このたび「画廊沖縄」ではそれも実現できるのだ。発刊される情報紙『ザ・ギャラリーボイス』がその役割も分担するという。美術ファンが続々と増える夢が正夢となる日もそう遠くないと信じたい。

県美術界の発展に大いに寄与する情報紙の創刊を祝し、その紙面の内容充実を期待して上原誠勇氏の益々の御健闘を祈ります。

黛を濃うせよ草は芳しき

（地方公務員）

東洋城

一枚の絵がこころの友となります。

ギャラリー

三寶社

〒902 沖縄県那覇市安里66番地 ☎(0988)67-5750

専門画材の店、

CULTURE PLAZA



株式会社 みつや書店

〒902 沖縄県那覇市壺屋1-1-3 ☎(0988)63-1650代

画廊 沖縄 企画案内

□渡名喜 元 俊展

5月17日 ~ 22日

六年間の教員生活に区切をつけて、佐敷町伊原にアトリエを構えた渡名喜元俊氏。昨年の二度（県民アートギャラリー、那覇市民ギャラリー）にわたる個展、埼玉県立近代美術館一美の際典の入選、東京アートコアの入賞、モダンアート協会展の初入選、沖展初入選と、かなり精力的に創作と発表活動を続けている。「途中で息切しないか」と云う外野の声にも気にする様子もない。前進するのみ、とにかく40才にしてバクハツ的である。沖縄の「虫」でありたい。「俺は佐敷の虫なんだ、虫と異りはないんだ」と云う。「地上のあらゆる生物が尊い存在なんだ」、「人間が創り上げたヒエラルキー（階級）は人間の勝手な幻想なんだ」と云い切る。今後の活動に大きな期待を寄せている作家である。

□那覇市民ギャラリー

- 5 / 3 ~ 5 / 8 めぬめ会織展
- 5 / 10 ~ 5 / 15 野鳥の会写真展
- 5 / 17 ~ 5 / 22 平良晃水彩画展
- 5 / 24 ~ 5 / 29 第8回新生美術展

□社アートギャラリー

- 5 / 7 ~ 5 / 15 現代作家版画展
- 5 / 17 ~ 5 / 29 暮しのクラフト工芸展

□ギャラリーみやぎ

- 5 / 3 ~ 5 / 15 沖縄先達展シリーズ(1)
- 5 / 17 ~ 5 / 22 加藤三郎介個展
- 5 / 24 ~ 5 / 29 大見謝文個展

□ギャラリー茶絵羅

- 4 / 26 ~ 5 / 8 カトラン展
- 5 / 10 ~ 5 / 22 金城 満展
- 5 / 24 ~ 6 / 5 高橋益之展

□ギャラリー小祿

- 5 / 17 ~ 5 ~ 28 叶秀樹個展

□ギャラリー1956

- 5 / 10 ~ 5 / 15 糸数ホルへ作陶展
- 5 / 19 ~ 5 / 22 陶器アクセサリー展

□びんクラフトギャラリー

- 5 / 17 ~ 5 / 26 第26回九州クラブデザイン展 INOKI NAWA

ギャラリーマン

伝統の重さパリ

長 嶺 豊

この仕事を始めて、今年四月で、満五年になりました。この五年間で、もっとも印象に残っているのが、画家達に同行してフランスに行った時の事です。初めてのパリは、私にとってこれまでの美に対する認識が、一変してしまう程、強烈なものでした。ジャンソンの流れるモンマルトルの丘の小さなレストランから見降したパリの街は、霧が、濃く立ちこめ、モネの描く幻想的な風景画を思い起させました。そして黄金色の朝焼けに浮び上がった町並のシルエットのアウトラインには、すみきった、緊張感のある美しさを感じ、町を歩けば、キスリングの絵から抜け出したような、パリジェヌ達とすれちがいます。ここは、まさにすべてが、美で満ち溢れています。また、200年間、ほとんど変わっていないというモンマルトルとその週辺の風景は、今後変わらないであろうと言われ、これ程、長くつちかわれてきた伝統の重さ、人間の歴史的な深さを、実感せずにはられません。反面、ポンピドーセンターが、古い町の中に忽然と現われ、人々の非難の対称となりました。が、やがて古いものと、新しいものと、うまく調和し、かつてのエッフェル塔が、そうであったように、ここもまたパリの名物の一つとなりました。このように、文化は積み重ねられ、自ら作ってゆくものだと思われました。沖縄も今後、伝統文化を生かしながら、新しい芸術をどんどん取り入れ、日常生活の中で、いつでもそれに、触れられる様になるともっと県民の文化意識が、高くなると思います。さて今度は、雑踏の中でうごめくニューヨーカーのエネルギーを、感じ取りにぜひアメリカへ行きたいと、考えています。

(画廊沖縄営業部)

感性を刺激し合う場

平 良 須賀子

私は、画廊沖縄のニューフェイスです。

事務に追われる毎日ですが、少しずつ画廊の仕事が分ってきたような気がします。

3月から仕事を始めて、最初の展示会が、ルイ・イカール展、二つ目が、黒崎彰展、そして、アフリカンアート展、と、次々に素晴らしい芸術作品に出会うことができました。仕事を通して、これだけのいいものに触れられる事に何より遣り甲斐を感じます。

画廊に集まる人達は、おしゃれで個性的な人が多いようです。お互いの感性を刺激し合い、それぞれの意見を飛交わす場として画廊は最敵だと思えます。

より多くの皆さんに、ギャラリーや、このギャラリーボイスを、コミュニケーションを深める場として利用していただきたいと思えます。

どうぞ気軽にギャラリーへお茶を飲みいらして下さい。皆さんの来廊を楽しみにしています。

(ギャラリーアシスタント)

編 集 デ ス ク

沖縄タイムスの「沖展」、琉球新報の「日展」、4月の沖縄は新聞両紙の美術戦争の観があった。ドッと押しかけた県内美術ファン！今日で入場者4万人！、あなたがウン万人目の幸運な人です！！、等と、美術展にしてはチョット大げさな宣伝の連日であった。おかげで大運動会ならぬ、大美術展が那覇、浦添の両体育館で大フィーバーとなった。この調子で市内のギャラリーに足を運んでくれるとよいのだが……………。

(上原)

絵のレンタルリース!

★月々 1,000円から

画廊沖縄営業部：☎66-5035